

発達障害のある児童生徒への支援について ～主体的で分かりやすい学校生活のために～

佐賀県立唐津特別支援学校・教諭・大野 登紀恵

【提案の要旨】「子ども達が主体的に活動する姿」を目指して行う支援の中で本校が大切にしている「見通しのもてる学校生活」「成功体験の積み重ね」「分かりやすい環境設定」という視点が、発達障害の児童生徒への支援にも有効であると考え本提案を行うものである。

1 はじめに

本校は開校以来、「各教科等を合わせた指導」を教育課程の柱とし、「子どもが主体的に活動する姿」を目指して研究を進めてきた。児童生徒一人一人の肯定的な見取りを起点として、どのような姿を願うのか目標を設定し、目標達成のために必要な手立てを講じることを大切にしながら授業づくりを行っている。また、児童生徒の学校生活においても、子どもが自立的、主体的に活動し、生活できる状況を作ることを目指している。そこで、三つの支援のポイントを基にした授業への取組を紹介する。

2 取組の実際

(1) 小学部 2 年 生活単元学習「きらきらランドであそぼう」の実践事例

①見通しのもてる学校生活

本単元が次の遊びの指導の単元へつながっていることが分かるように、毎時間、授業の始めに電子黒板に単元カレンダーを提示し、いつまで作る活動があるのか、いつから遊べるのか見通しがもてるようにした。また、毎日何を作っているのか、どんな活動をするのか、だれとするのかなどを説明してから、活動に入るようにした。

②成功体験の積み重ね

光るスタンドグラスづくりの活動を A さんができるだけ一人で行えるように支援を工夫した。スタンドグラスの枠を作るために、黒く塗ったアイスクリームの棒を使って独自の補助具を用意した。また、ボンドを出す量が分かるように見本を示したり、手が汚れることが苦手な A さんのために、ボンドを付けるための棒、枠が出来上がった時に、補助具からうまく抜くための段ボールなどを準備したりしたことで、最初から最

後まで、自分の力でやり遂げるようになった。

③分かりやすい環境設定

その他の活動においても、活動が複数ある場合は一つの活動に使うものをまとめてかごに入れる。手順書を作り、それぞれの手順で使うものを小分けのケースに入れておく。などの手立てがあることで、どの順番で活動を進めていくのか、何を使って作るのかが分かりやすくなった。

これらの毎日の積み重ねがあって、自分から主体的に取り組む児童の姿を見ることができた。

(2) 中学部作業学習 令和 7 年度「からとく夢いちば」の実践事例

①見通しのもてる学校生活

年間に 3 回作業学習の単元を設定し、1 年を通して、繰り返し・継続的に作業学習を行うことができるようにした。また、作業学習単元において見通しをもつために、単元初日のオリエンテーションで、「単元期間はいつから・いつまでか」「誰が、どの班で、どこで活動をするのか」「作業学習のめあてはなにか」「学校祭の販売会はいつか、去年の様子」を分かりやすく図や写真も交えて示した。単元カレンダーも作業学習の活動場所に貼り、作業学習の期間や、販売会まであと何日ということも実感できた。

実際の作業では、作業手順表を準備し、生徒がそれを基に自分で活動を進められるようにしたり、自分で準備を始めて作業に取り掛かれるように、用具の場所を決めたりした。その結果、生徒たちが自分の活動内容が分かって落ち着いて活動し、見通しをもって作業を進めることができていた。

②成功体験の積み重ね

2 学期の学校祭の販売会では、たくさんのお

【第7分科会 発達障害への支援】

客様から、自分たちの製品を褒められたり、買ってもらったりして、嬉しそうな表情が多くみられた。自分が作った製品への自信や次回も頑張ろうという意欲にもつながった。

③分かりやすい環境設定

Bさんは、移動式の棚を作業の道具入れにして自分で作業場所に運んで作業を開始するようにし、机上のレイアウトも決めて、毎回同じ環境で行えるようにした。棚のかごを順番通り上から取って進め、それを全部行くと休憩になるため、終わりが分かって安心して活動することができた。教師が、Bさんの様子を見ながら、かごの数の調整も行った。活動のスケジュールや教師へ知らせるカードなどをいつも見えるところに配置し環境を整えると、作業と休憩の取り方が分かることで安心でき、一人で作業を続けることができた。また、教師もそばで共に作業を行いながら、生徒が困ったときに言葉かけをするなど、必要な時に的確な支援を行うように心掛けることで、自分で作業を進めることができた。

(3) 高等部 作業学習の実践事例

①見通しのもてる学校生活

学校祭において取り組んでいる期間中の時間割を、教室のホワイトボードに提示した。同じような1日の流れを4週間ほど毎日繰り返すことで分かりやすく、学校生活にも見通しがもちやすかった。さらに生徒に応じて、より見通しをもちやすくするために、個々で時間割を提示したり、一人一人に作業時間の進め方を提示したりもした。作業室の中には、一日の生活の提示だけでなく、単元期間中の全体の日程も提示して、見通しをもてるようにした。

②成功体験の積み重ね

担当する作業が一人でできるように様々な補助具等を準備し、できる、できた体験を積み重ねられるようにした。被服班では、ビーズのアクセサリーを一人で作ることができるようビーズなどを順番に通せるようにしたり、紙工班では、祝儀袋の作成のための折り目をつけるガイドを取り入れたり、木工班では、トリマーを一人で安全

に使えるようなガイドを用意したりした。自分が担当する作業を一人でできるという成功体験は自信にもつながり、さらに意欲的に作業に取り組めるようになった。できたこと(成功体験)が積み重なり、意欲を向上させることができた。

③分かりやすい環境設定

作業室には、道具や材料が分かりやすいように、表示をしたり、材料などを置く場所を固定して見やすくしたりしている。一人一人にも手立てをとり、自分が担当する工程の道具や材料を、何がどこにあるか分かりやすいようにひとまとめにした。

3 結果

本校における 三つの支援のポイント(見通しのもてる学校生活、成功体験の積み重ね、わかりやすい環境設定)を基にした取組により、発達障害がある児童生徒の主体的な姿が見られ、有効な支援であると考えている。うまくいかないことも多くあるが、児童生徒の日々の様子を細やかに見取り、支援の検討や変更を行うことで、少しずつ改善が図られていった。そして、この取組を続けることで、自分から主体的に、自立的に活動に取り組んだり、やりがいをもって活動に取り組んだりすることができた。また、達成感や成就感を感じられることで、次の日や次の単元等にも期待感をもつ児童生徒の姿が見られた。この児童生徒の姿を本校では、現在の学校生活が豊かになっていると捉えている。

4 考察とまとめ

本校における支援は、児童生徒全員に対して行っているものであるが、活動や生活を分かりやすくする支援は、発達障害を併せ有する児童生徒にとっても過ごしやすい学校生活を提供することにつながっている。これを日々積み重ねることで、将来の豊かな生活にもつながっていくと考えている。

これからも、児童生徒が達成感や成就感、期待感をもつことができる授業のために、ひいては、主体的で、分かりやすい学校生活作りのために授業実践を重ねていきたい。